『もりおかの短歌』

冬の部　優秀賞十首

頬を刺す
朝の寒さが懐かしく
帰ってきたのこの盛岡に

岩手県盛岡市　小笠原　直美

岸辺にて集いなき交う白鳥は
二度泣き橋と
知らずやあるらむ

岩手県盛岡市　蟻川　ひろみ

津軽弁にて熱心に太宰説く
友へ聴かせし
啄木のこと

青森県青森市　鈴木　操

キュッキュッと
雪が鳴く街　盛岡で
母と離れて　初めての冬

岩手県盛岡市　林　晶子

雪明り
橋のたもとの古書店は
咳する店主ガラス戸の風

東京都練馬区　久慈　博子

ふりむけば我を抱きし岩手山
春の佳き日も
凍える朝も

宮城県仙台市　郷家　美磨

寺町の雪の御堂に
寒行の僧の読経が
静かに流る

岩手県盛岡市　小林　貴史

また来るよ
二度泣き橋から手を振って
巌鷲山としばしお別れ

埼玉県越谷市　倉部　りえ

如月に
生まれし人の夢を見て
かなしく眺むふるさとの山

岩手県盛岡市　赤坂　昌信

いとほしや　泣き訴へつゝ
萎えかえり　尿ゝまみれ寝る
エンチこの赤児は

東京都江戸川区　岡本　誠教

〔講評〕冬と言えば肌を刺すほどの冷たい風を運ぶ岩手山の吹き降ろし。その凛とした風景はまるで座禅のときに肩を打たれるような心地よさがあり、叱ってくれる親のようでもあったり。そこに故郷の優しさを見出したのでしょう。

※今回審査の結果、ジュニア部門の優秀賞は、該当がありませんでした。

平成二十八年三月選　冬の部
投稿数　三百六十八首
選者　山本　玲子